

成人向け
R18

オマケ怪談



本編31ページ
+おまけ怪談4本

唯一の肉親だった父親が
ヤバい筋から借金をしていた

まともに働いて
返せる金額じゃない

返済元もそこは
折り込み済みで

○学生でも短期間で大金を稼げる
そんな仕事を紹介された

表向きは内容は
深夜とある廃ビルの見回り

でも、本当の仕事は
最上階にある扉の前で
行う

ガチャ

ガチャ

フ
ツ
フ
ツ
フ
ツ



もちろんなまともな
仕事じゃない

それでも
こんなことをする
ハメになるとは
思ってたかった



だって彼女に
会えるんだから...
ブッ
ブッ



でも
今はこの仕事をやれて
よかったと思ってる



毎日彼女に
新鮮な精液を飲ませる
これが僕の仕事

腹を満たすため？
生贄的なもの？
それとももうと別の…

最初こそ色んなことを
考えていたけど
今はもう辞めてしまった

ギョッ
ギョッ
ギョッ





最初は仕事のため
借金の返済のため
だったけど

今じゃもうそういう
感覚じゃない
言葉は出てこないけど
もっと別の...



目のクマが
取れなくなったなあ
体重もどんどん
減ってるし...

このままだと僕
死ぬんだろうな

...でも
それでいいんだ





自由になったところで
居場所なんて元から
無かつたし

また痛めつけられて
誰にも必要とされない
人生を死ぬまで送るだけだ



それにもう
後戻りできない



だから
このまま...





今までの人生で
この人だけだ



こんなに僕のことを
求めてくれたの



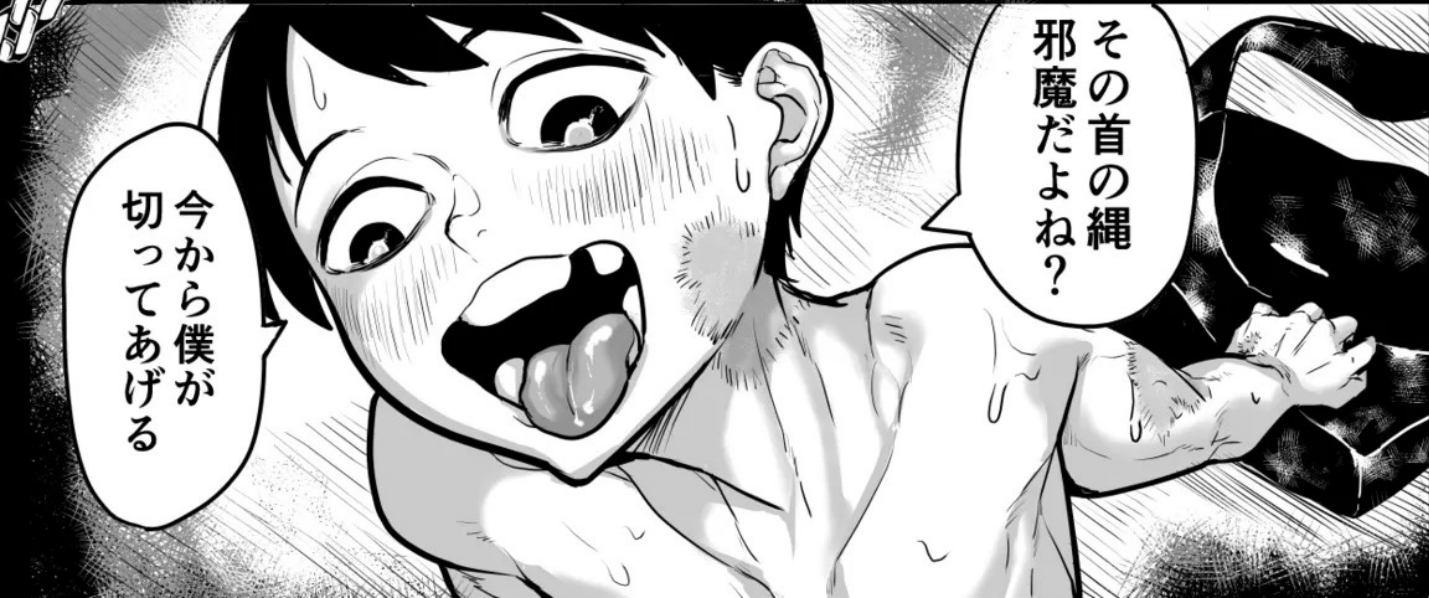
もうそろそろ
気づく頃かなあ



その前に...



ちよっと
待ってて



今から僕が
切ってあげる

その首の縄
邪魔だよな？



ちょっと汚れてるけど
切れ味は問題ないから

さっきちゃんと
確認したんだ



じっとしててね



借金取りの人がさあ
お金は払い終わったから
もう来なくていいって

僕は続けるって
言ったんだけど
仕事は別の人に
任せるって



僕しかしゃいけない
崇高な行為なんだ

それが
わからない人は邪魔





あんな奴の血なんて
だめだよ

僕だけを
必要としてよ

ボボボ

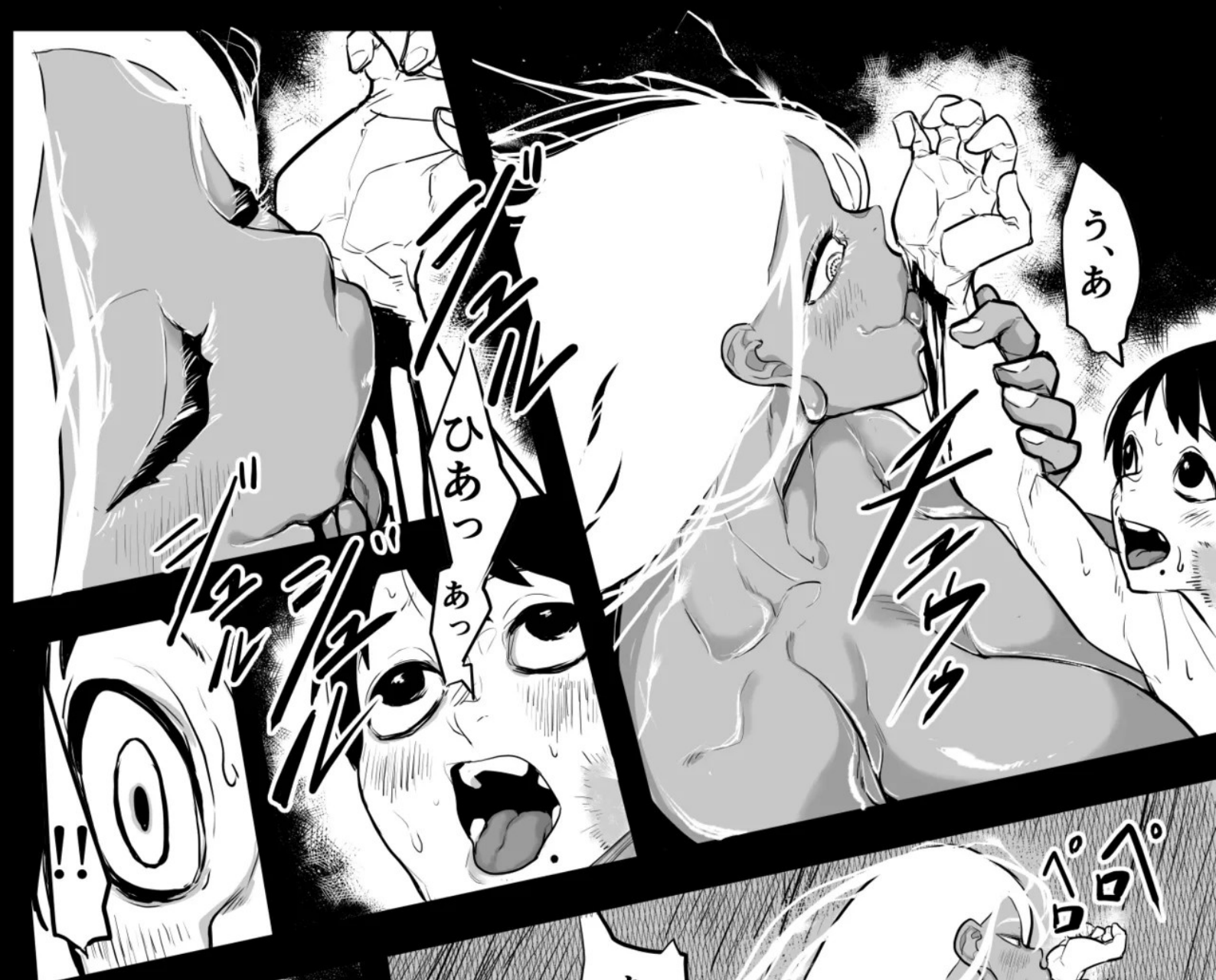
ククク







あ、あの...



う、あ

ひあっ
あっ



うららら...



あ、あの僕っ

僕は...



なんで：
こんなことに
なってるんだっけ？

もう

よく分からない

ストリ
ストリ

分からないけど
でも...

ぼく今
人生で一番



グ
グ
グ

グ
グ
グ

人生で1番
気持ちいいことしてる





な

な

な

な

な

な

ちんちんっ♡
ちんちん
気持ちいいっ♡

ウネウネッ♡
やばいっ♡

ちよっ♡
やっ♡ばっ♡

ひっあっ♡

な

な



これダメっ♡
イっっちゃう♡
ちんちん
バカになるっ♡

パッパッ

パッパッ

パッパッ

パッ

パッパッ

むおっ♡
おっ♡おっ♡おっ♡

パッパッ

パッパッ

気持ちいい
気持ちいい

気持ちいい
気持ちいい

ムロ
ムロ

ベ
ロ
オ

カク
カク
カク
カク

グ
グ
グ

ロ
ロ
ロ

気持ちいい

ム
ム
ム

ハ
ハ
ハ







これ、死ぬ

なのに
ちんちん固くなってる

イクの
止まんないっ♡

射精しちゃうっ♡





あとがき

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。沼坂星作です。

この作品は、友人や知人から聞いた怪談や不思議な話をもとに描いています。前回描いた「あの日、廃屋で僕の身に起きた出来事」と同様に、

今回もその元になった話を書いておこうと思います。

今回は4本のお話です。少し長くなりますが、お時間があれば、どうぞお付き合いください。

◇Aさんの話

Aさんが勤める会社のビルは、少し奇妙な構造をしたフロアがあるといいます。そのビルは18階建てなのに、エレベーターは17階までしか通っておらず、18階に行くには階段を使う必要がそうです。

ただ、そこにはオフィスのような設備はなく、社員が行くことはまずなく、そして、その18階のフロアが奇妙なのだといいます。

この18階がどんな構造かというと、階段を上った先の扉を開けると、小さい踊り場があり、左に折れ曲がる形で短い階段が続く。その先には横に広がる廊下が伸びていて、照明はあるものの窓はなく、途中で2つの扉があるだけ。

2つある扉のうち1つは、「点検用設備室」といった旨のプレートが付いており、用途がわかる。

問題はもう一方の扉で、こちらにはドアノブも取っ手もなく、押しても引いても開かない、いわゆる“開かずの扉”になっているのだそうです。

なぜこんな構造になっているのかというと、もともと19階建てだったものを、18階と19階を統合する形で一部を潰し、便宜上「18階」として扱っているのだそうです。

しかし、なぜそのような改築がなされたのかという理由までは明らかではなく、わかっているのは「先代の社長の指示だった」ということだけで、

それ以上の詳細は、誰にもわからないのだそうです。

◇Bさんの話

Bさんが以前働いていた会社は、海沿いのオフィス街にあり、その一角のビルとビルのあいだに、細い道路があるそうです。

この道路は周囲のビルの配置のせいで、常に日陰になっていて、また、車が通り抜ける必要のない構造でもあるため、自然と様々な車の“仮の駐車スペース”のような扱いになっているらしく、配送業者が積み荷の整理をしていたり、タクシーの運転手が休憩してるそうです。なので、昼間にそこを通ると、タバコを吸いながら談笑する人たちや、トラックから荷物をせわしなく運ぶ人たちの姿が見られたといえます。

ある日、Bさんが深夜まで仕事をしていたときのこと。何か食べ物を買おうとコンビニへ向かう途中、その道路の前を通りかかったそうです。

時刻はすでに深夜0時を回っていましたが、昼間と変わらず道にはびっしりと車が停まっており、人もいる。「こんな時間まで大変だなあ」と思いながら歩いていたそのとき、ふと、道に面したビルの壁が気になったそうです。

なんとなく“壁が動いている”ように見え、わずかに赤みがかっている、ような気がする。そんな違和感を覚えたBさんは、その道に入り、壁に手を触れる。壁からは“人肌のような温もり”と、“女性特有の肌の柔らかさ”を感じたそうです。

驚いてすぐに手を離れた瞬間、Bさんは複数の強い視線を感じ振り向くと、さきほどまで談笑していた人たちや、車の中にいた人たちが、皆一斉にBさんをじっと見つめている。

その場から動けずにいると、近くでバイクに寄りかかりながらタバコを吸っていた男性が、Bさんに向かって

「不敬ですよ」

音質の悪いスピーカー越しのような、ざらついた声質だったそうです。

◇Cさんの話

Cさんの勤めている会社のビルには、新棟と旧棟の2つがあり、途中の階で連絡路が設けられ、行き来ができるようになっているそうです。

その会社は24時間稼働しており、常にどこかのフロアには人の出入りがあり、電気もついているそうなのですが、

ただ、深夜のある特定の時間帯だけは、連絡路がある階の電気が消えるのだそうです。表向きの理由は「電気代の節約」とされているものの、実際には従業員がこの連絡路を使わないようにするためなのだといいます。

というのも、その時間帯にごく稀に、旧棟から新棟に向かって神輿を担いだ集団が連絡路を通過することがあるそうで、その集団と鉢合わせしないように、という配慮なのだ。

Cさんいわく、神輿を担いでいるのは、身長1メートルにも満たない、頭の大きな人たちで、彼らは大きな掛け声を上げながら進むそうで、その声は上下の階にも響くほどで、実際に耳にしたことがある人も少なくないとのこと。

ただ、問題なのは“彼ら”ではなく、ごく稀に、神輿を担いでいるものが別の場合があり、それは、背中が天井に届くほどの真っ赤な大男が、身体を「9の字」に折り曲げるような姿勢で、神輿を抱えるようにして走っていくのだそうです。

この赤い大男を目撃すると、非常にまずいことが起こるらしく、そもそも彼が現れた時点で会社にとっての“凶兆”であり、実際、この時間帯にフロアから「誰かが走る音」が聞こえると、一部の社員に緊急の出勤命令が下されるほどの事態となるそうです。

Cさん自身も、過去に2度その現象を体験し、どちらのときも会社が傾くほどのトラブルやスキャンダルが発生したといいます。

◇Dさんの話

Dさんが子どもの頃に住んでいた団地の近くには、「自転車公園」と呼ばれる場所があったそうです。

本当の名前は別にあるそうですが、その公園には大量の自転車が置かれていたため、いつしかそう呼ばれるようになったとのこと。

その公園は工場地帯の一角にあり、大人はもちろん、子どもですらあまり遊びに行かない場所だったそうです。遊具もなく、ベンチがひとつあるだけの殺風景な場所で、いつの間にか工場で働く人々が駐輪場代わりに使い始め、やがて壊れた自転車や不法投棄されたものまでが放置され、“自転車で埋め尽くされた場所”になってしまったとのこと。

そんな場所なので、親から「危ないから行ってはいけない」と言われていたそうなのですが、子どもだったDさんは、逆にその禁じられた場所に興味を持ち、よく友達と遊びに行っていたそうです。

その日もDさんは日が暮れるまで自転車公園で遊んでいたそうなのですが、家に帰ったあと、当時流行していたシールを集めたアルバムを、公園に忘れてきたことに気づいたそうです。

Dさんはあわてて、親には団地内のスーパーでアイスを買ってくると嘘をつき、夜の公園へと走って向かったといいます。

しばらくして公園に到着し、中に入ろうとした瞬間、Dさんは思わずギョッとしたそうです。いつも無秩序に置かれているはずの自転車が、地面に倒れるような形で、整列するようにびっしりと並べられている。ただ、公園の入り口から奥のベンチへと続く直線上だけは、自転車が一台も置かれておらず、まるで“歩道”のようにになっている。

そして、その奥のベンチには、誰かが座っている、ように見える。暗がりの中ではっきりとは見えないが、背格好や長い髪、裾の余った服装から、女性のように見えた。

その手元には、Dさんが忘れたアルバム。あっと思って公園に一步踏み入れた瞬間、公園中の自転車の車輪が一斉に回転を始めた。まるで昆虫が出す警戒音のような、甲高い金属音が辺りに響き渡り、Dさんは恐怖のあまり、後ろも振り返らずに家まで走って帰ったといいます。

翌日、再び公園に行ってみると、自転車はいつも通り雑然したようになっており、ベンチにはDさんのアルバムが、自転車の油で汚れた状態で置いてあったそうです。

以上、4つの話はいずれも時代は異なるものの、ほぼ同じ地域・建物で起こった出来事です。今回描いたマンガは、これらの話をなんとなく頭に入れながら制作しました。

またの機会があれば、そのときはぜひ、よろしくお願いします。

※インターネットへの違法アップロード、ネットオークションフリマアプリなどへの出品等、不特定多数に向けた全ての転載・転売行為を禁じます